

学生海外調査研究	
中国の大学における日本語専攻クラスを持続可能性会話語教育に導入する可能性 — 卒業2年後、参加者に半構造化インタビューを通して —	
秦 松梅	比較社会文化学
期間	2014 年 8 月 8 日（木曜日）～ 2014 年 8 月 16 日（土曜日）
場所	中国・北京
施設	某株式会社

内容報告

1・本調査研究が博士論文に置ける位置付け

本報告者の博士論文では、言語生態学を理論として中国の大学日本語教育における会話授業のモデルを提案することを目的とし、以下の五つの研究を行う予定である。

研究 1 は生態学的リテラシーの育成のプロセスの実態を探る。

研究 1-1 の題目は中国の大学における日本語を専攻している学習者が考えている問題点—中国東北部 4 大学の日本語専攻学習者への半構造化インタビュー調査から—（日本語教育学会誌に投稿し、現在査読中である）

研究 1-2 の題目（暫定）は、中国の大学における日本語を専攻している学習者が期待している会話活動はどんなものであるか—中国東北部 4 大学の日本語専攻学習者への半構造化インタビュー調査から—（論文作成中）

「要旨」会話教育をどう改善するかは、中国大学会話教育における喫緊の課題の一つである。何故学年が上がるほど会話に苦手意識を持つようになるのか。学年が上がって語彙や文型が豊富になれば、その分、会話は相対的に易くなるのではないだろうか。そこで、本研究では、改善策を提案する前段として、大学で会話授業を受けてきた学習者が自分たちの受けた会話授業をどのように捉えているのか、どこに問題点を感じているのか、学習者側の意識を探ることにした。中国大学会話教育の改善に向けた基礎資料として学習者による問題の受け止めを知ることは不可欠だと考えるからである。また、学習者はどのような会話教育を期待しているかを明らかにする調査も必要である。そうすることで、問題と期待の両面から学習者の会話授業の捉え方を明らかにすることが可能となるであろう。

研究 2 は当事者の評価を大切に、新たな会話授業のデザインに対して中国人日本語学習者を対象者としての調査である。

研究 2-1 の題目は、中国人学習者は事前課題と日本語母語話者の参加を取り入れたグループワークによる内容重視の会話授業をどう受け止めたか—中国の大学における日本語専攻クラスの場合—としている。

「要旨」中国の大学における会話授業の改善を目指して、日本語専攻会話授業に事前課題と日本語母語話者の参加を導入したグループワークによる内容重視の会話授業の実践を行った。そこからデータを収集し、学習者が今回の新たなデザインに対してどのような受け止めを形成しているかを検討することで、会話教育のあり方について提言することを目的とする。学習者の受け止めは修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを援用して探った。分析の結果、学習者はこれまで受けてきた会話授業と対照しながら、今回の会話授業に対する肯定的な評価をしていたことが分かった。この論文は2012年『言語文化と日本語教育44号』に査読付きで採用された。

研究2-2の題目は、内容上の事前準備は会話参加をどのように促し支えるか—中国の日本語専攻大学生を対象とした会話活動におけるやりとり分析から—としている。

「要旨」岡崎(1994)の内容重視の日本語教育に基づき、中国の大学で主専攻として日本語を学ぶ大学3年生を対象に、事前準備を取り入れた内容重視の会話教育を試みた。その目的は、内容重視の会話活動のあり方を探ることである。インタビューを通して、この授業に対して参加者から肯定的な評価が得られている。本研究では、肯定的な評価が得られている。本研究では肯定的な評価が授業中のどのようなやり取りから裏づけられるのか、教室談話分析の手法を援用して質的に分析した。分析の結果、参加者が既有知識にアクセスしながら日本語で話す内容を深く考えていたこと、言語が考えた内容を伝える媒介となっていたこと、自信を持って概念化を行っていたことに加え、仲間と一緒に食品の問題は社会の風潮の乱れという要因と関連付ける試みを行っていたことがわかった。さらに、日本語でうまく言語化・発音化できない場合、母語を活用したり、仲間の助けを得たりすることによって困難を乗り越える様子が見られた。この結果を踏まえ、会話活動のあり方として内容を重視すること、それを助けるための母語による事前準備が必要であることが示唆された。2013年『人間文化創成科学論叢』第16巻に査読付きで採用された。

研究3は中国における生態学的リテラシーの育成をめぐる日本語会話教育の可能性を研究する予定である。題目は(暫定)、中国の大学における日本語専攻クラスを持続可能性会話語教育に導入する可能性—卒業2年後、参加者に半構造化インタビューを通して—としている。(今回の研究調査である)

最後に研究1から研究3までの結果を博士論文にまとめ、その結果から得た知見から生態学的リテラシーの育成をめぐる日本語会話教育のデザインへの提起をする予定である。これらの研究は博士論文の研究結果と実際の教育現場での指導に結びつける一助になると考える。さらに、博士論文執筆において、大きな意義を持つ。なお、研究1と研究3は「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」プロジェクト「学生海外派遣」プログラムの支援を受け、研究調査ができたことを感謝しており、調査にご理解とご協力を頂いた対象者にも、感謝の限りである。また、いつも心強い励ましと研究への道筋を立ててくださる指導教官に心より感謝申し上げたい。

2・海外調査研究の背景

中国の教育部によって制定された教育指導要領「大学日本語専攻高学年段階教育大綱2001」では大学の会話授業の目標は仕事や日常における実際のコミュニケーションにすぐ役に立つような日本語力

を身につけることが目標となっている。具体的には、仕事で日本語を使えるようになること、日常会話ができるようになること、自由に流暢に話すこと、日本人とコミュニケーションできること、学んだ知識を運用して話すことが挙げられている。しかし、中国大学会話教育について様々な問題点が指摘されている。楊（2006）は、中国の大学で日本語を専攻している学習者は簡単な日常会話も流暢にできず、運用能力が非常に低いという。また、日本語で話すことに対して苦手意識を持つ学生が多く、しかも学年があがるにつれ、その割合が高くなること、また多くの文法を学んでいるからこそ、それを使いこなせないことが葛藤を生み、彼らの自信を奪ってしまっているという（福永 2013）。知識があるのに運用ができないという問題の背後には様々の要因がある。そのため、会話授業の問題を改善するために、教育の現場でいろいろな改善策を考えている。しかし、中国における日本語専攻クラスの中・上級学習者を対象者に向けて新たなデザインを行った後に、中国の大学において会話授業で行った内容が学習者にどんな影響を及ぼしたか、学習者が卒業後にどんな影響を受けたかを明らかにしなければ、会話授業の問題点をよりよく改善することは難しいだろう。申請者は 2011 年、中国の大学における会話教育に焦点を当てコミュニケーションの鍵を担う会話授業で実践を行った。現在、当時の日本語会話授業は、社会人になった参加者は社会人の立場で当時の実践をどのように考えているかを明らかにすることで、現在の生活にどのような影響を及ぼしたかを明確し、残った問題点を探り、改善案を立てみる。さらに、内容重視の日本語教育の次の段階として持続可能性日本語教育は中国の大学における中・上級日本語専攻クラスに導入する可能性について検討する必要があると考えられる。

3・先行研究

言語教育を、留学やビジネスの道具・手段としての言語運用力を養成する「ツールとしての言語教育」（岡崎 2009:70）と、言語以外の諸教育のカリキュラムと相互交流させることによって、言語の学習以外の学習（つまり内容にかかわる学習）と言語教育との統合的学習を成立させることを目指す「内容重視の言語教育」である。（岡崎 1994:227）以下に使われていた持続可能性とは、グローバル化の下で変動する世界において、学習者の母国や日本、他の国々における自己および人々にとって持続可能な生き方とは何かを考え、実践することを追求するというものである（岡崎 2010:7-8）。つまり、内容に関する思考力と 4 技能の統合的な発動で実現される言語能力を培うことを目指している。

岡崎（2013）は、自己を起点に持続可能に生きる展望と力の育成を目指す言語教育が、第一に、なぜ学士課程において必要なのか、第二に、なぜ他の人文系科目、例えば哲学だけではなく日本語教育という言語教育において追求されるのか、この二点を切り口にして、学士課程教育における持続可能性日本語教育の意義を提示した。持続可能性日本語教育とは、どうすれば持続可能に生きられるかを教室の仲間と共に追求する言語教育である。具体的には、学ぶ主体である大学生が自己を起点にして、グローバルに広がっている人、モノ、コトの間に繋がりを見出し、その繋がりを、自己を起点にして紡ぎかえることで持続可能に生きる展望と力を育むことが目指される。学習者が社会に出ると直ちに直面する雇用の問題を出発点に、人やモノ、コトの繋がりを丁寧に辿っていくことを通じて、グローバル化社会が如何に人間のみならず、自然も言語をも持続不可能なものにしているか、その構造が具体的に理解される。

それは、例えば自分が努力しないから正社員になれないのだなどという自己責任論から若者を解放し、自己に対する信頼感を回復させるものとなるであろう。このことは、言い換えれば、自己を起点にして人やモノ、コトの繋がりを一つひとつ紡ぎかえていくことで、持続不可能な生き方から持続可能な生き方へと反転させ得ることを示唆している。「新たな教養教育」を超える学士課程教育が必要である理由はここにあり、言語教育こそがそのような教育の場を提供できる。人間生態をどのように持続可能なものに保全していけばよいのかという課題に取り組むことは、即ち、言葉を使って考え、他者と相互に言葉を交わし、考えを新たにし、統合していくといった言語がよりよく機能する過程を作り出すことである言語教育への生態学的アプローチでは、このような取り組みが、言語の教室でなされる。従って、学士課程教育における教養としての日本語教室でなされることは、受講生である大学生の人間生態と一体となった言語生態の保全の追求である。受講生一人ひとりが、自分はどうか生きるかという問いをもち、その問いに対する答えを仲間と一緒に追求することが教室でなされる全てである。持続可能性日本語教育は学士課程においての必要性を述べた。

持続可能性日本語教育を日本で行っている研究に鈴木（2011）がある。鈴木（2011）は、持続可能性日本語教育を留学生日本語教育として展開することによって、学習者に何を提供できるのかを、実践報告を通じて検討した。都内私立大学の日本語科目として、2011年の春学期に開講された「自己と世界の持続可能性を考える」という科目を対象とする。本科目は持続可能性日本語教育として岡崎（2009）等を参考に、デザインされたものである。週1回90分授業、全13回のシラバスを組んで行われた。活動は、人間の生態を支える「世界のモノ・コト・人」（岡崎 2009）にまつわる素材、特に生命維持、ライフコースの基盤として生存を支える「雇用」と「食糧」を内容とするデザイン（岡崎 2011）を中心に、2011年3月に起こった震災・原発事故などにも触れながら、留学、貧困、結婚など、学習者の今後の持続可能な生き方を考えていくうえで関係が深いと思われるテーマを配置した。実践活動の目的は、自身の今後の人生の歩みの参考になるような、一歩先を歩いていると思われる人にインタビューを行うことによって、社会人となった数年後の自分をイメージしやすくすることである。以前からの知り合いに改めて質問をすることにより、普段は見えていなかった他者の姿を理解し、新たに関係を結び直すという期待も込めた。学習者の振り返りを通して示した結果、本活動は学習者にとって、仲間とのやりとりによって自分をふり返り、これまで持っていなかった世界と自己の関連について考える態度を培う機会になっていたことが窺われた。生態学的リテラシーはらせん的に構築されていくものであり、学習者が今後も生きていく過程において更新、深化していくことが目指される。持続可能性日本語教育としての本活動が学習者に受け入れられたことは、これからどのような人生を作っていくかの方向性を自覚することにつながり、学習者が今後も続く生態学的リテラシー構築の態勢作りに結び付くと推測された。日本国内で持続可能性日本語教育の実践は留学生を対象者として行ったが、JFL環境で、海外における大学日本語教育として実践されたアリアンティ（2011）や劉（2011）に共通する持続可能性日本語教育の実践の特徴として、（1）母語の活用（2）事前課題の提示（3）協働の3つの特徴をあげられる。

報告者は、2011年に中国黒竜江省某大学の日本語科の了承を得て、週一回の会話授業（2コマ、120分）で会話活動を行った。実施期間は2011年5月中旬から6月4日までの3週間で、合計3回行った。今回の教育実践に参加した学習者は中国人学習者17名と日本語母語話者（留学生）3名である。実践を

行った当時、中国人学習者は全員日本語能力試験（JLPT）N2 級に合格していたが、日本語能力試験（JLPT）N1 級試験は未受験であるため、中級と判断した。日本語母語話者は中国へ中国語を学んでいる留学生である。授業の大きなテーマを「食」とし、内容は 3 回とも関係のあるものにした。「食」のような社会的問題は学習者にとって身近であると考えたためである。当時の社会的な背景を考慮し、食を巡る事件、食の安全、食のスタイルという関連性がある 3 つの内容を選んだ。その理由は、当時、中国では、国内だけではなく、他の国の食の問題に関するニュースも頻繁に伝えられ、生活に直接関わっている話題として社会的に受け止められていたからである。会話授業を行う前に学習者に会話のテーマを与え、各自が主張したい内容についてインターネットを使って検索するなど事前準備を課題として課した。日本語母語話者にも同様の課題を課した。授業当日は、参加者を 3 つのグループに分けた。最初に、報告者がテーマに関する内容を導入し、当日の目標を明確にした。次に、ウォーミングアップ、GW（グループワーク）によるディスカッション、ポスターセッションによる発表、質問、フィードバック、振り返りシートへの記入、次回の連絡という流れである。この流れは、毎回同じとした。母語を活用するチャンスを与えるため、事前準備とグループディスカッションを行う場合、必ず日本語で準備や日本語で話すという指示は出さなかった。この会話活動のやり方の特徴をまとめてみると、(1) 母語の活用 (2) 事前準備 (3) 協働という特徴が持っていると言える。秦（2011）は、中国の大学における会話授業の改善を目指して、日本語専攻会話授業に事前課題と日本語母語話者の参加を導入したグループワークによる内容重視の会話授業の実践を行った。そこからデータを収集し、学習者が今回の新たなデザインに対してどのような受け止めを形成しているかを検討することで、会話教育のあり方について提言することを目的とする。学習者の受け止めは修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを援用して探った。分析の結果、学習者はこれまで受けてきた会話授業と対照しながら、今回の会話授業に対する肯定的な評価をしていたことが分かった。しかし、当時、肯定的な評価を得た会話実践から学習者は何を得たか、生活の中にどのように生かしているかを明らかにする必要性があり、中国における日本語会話教育を持続可能性日本語教育に取り入れる可能性を検討する必要があると考えられる。

本研究は、2 年後、当時この実践に参加した学習者にインタビューを通して、内容重視の会話授業における学習者は実際の所何を得たか。実践後、生活の中でどのように得たものを生かしているかを明らかにし、中国の大学における日本語専攻クラスに持続可能性日本語会話教育を導入することの可能性を示したい。

4・研究目的・課題

研究目的：中国における内容重視の日本語会話教育から学習者は何を得たか、生活の中にどのように生かしているかを明らかにして、持続可能性日本語会話教育を日本語専攻クラスに導入する可能性があるかどうかを明らかにし、中国の大学における会話活動のあり方を提案することを目的とする。研究課題は以下のように設定している。

研究課題：

- (1) 2 年後のインタビューを通して中国の大学における日本語専攻クラスに内容重視の会話活動から

学習者は何を得たか、生活の中でどのように生かしているか

(2) 2 年後のインタビューを通して中国の大学における日本語専攻クラスに持続可能性日本語会話教育を導入することは可能だろうか

5・研究方法

5・1 フィールドの概要

データ収集の手順は対象者 A、対象者 B が 2011 年の実践に参加した学習者である。2014 年 8 月 8 日から 16 日までの間にインタビューアの承諾を得て、一人 90 分ぐらい中国語でインタビューを行った。手順としては、まず、2011 年の会話活動の文字お越しの資料（仮名で処理した）を一緒に読んで内容を確認した。次に、半構造化インタビューを行った。対象者 A は北京市内のある留学仲介の会社で働いている。大学卒業後、大手日本企業で働いていたが、仕事の内容や人間関係の原因で仕事をやめ、現在の仕事に至った。対象者 B は現在北京市内の某貿易会社に勤めている。大学卒業後、日本の子会社で働いていた。仕事の内容に興味を持っていなかったという理由で、離職してから再就職に至り、現在の会社に勤めている。

5・2 半構造化インタビューの内容

表 1 半構造化インタビューの内容

1	現在の生活はどうですか。2011 年の会話授業はどのようにやりましたか。印象深いところがありますか。
2	その会話授業に参加した時、何をやりましたか。（実践の時の文字お越しやインタビューの資料を見せます）
3	あなたが参加した実践はどうでしたか。学んだことがありましたか。（あったとすれば、それは何ですか。）どこがいいですか。改善したほうがいいところがありますか（どのような問題があったか）
4	今はその時に得たものをどのように生かしていますか。今の生活にどのような影響がありますか。
5	大学の会話授業でやりたい活動はどんな活動ですか。

5・3 分析方法

本研究では、インタビュー対象者全員の承諾を得て録音し、文字起こししたデータとして用いる。談話分析の手法を用いて質的に分析する予定である。

6・まとめ

本調査は、平成 26 年度の「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」プロジェクト「学生海外派遣」プログラムの支援により得られたデータは、現在まで収集した資料やデータなどを加え、2015 年の国際学術大会で発表し、その後、日本国内の学術誌に投稿する予定である。査読論文の形で公表するとと

もに、現在執筆中の博士論文の一部として組み入れ、本海外調査研究の成果とする予定である。

参考文献：

- アリアンティ・ヴィシアティ（2011）『内容重視のグループリーディングーインドネシア人の日本語学習者の場合』平成 22 年度お茶の水女子大学大学院修士論文(未公開)
- 岡崎眸（1994）「内容重視の日本語教育ー大学読解教室の場合ー」『東京外国語大学外国語学部論集』第 49 号,227-244
- 岡崎眸（2013）「持続可能性日本語教育ー言語教育への生態学的アプローチー学士課程教育における意義ー」日本言語文化研究会論集 9 号 (<http://www3.grips.ac.jp/~jlc/jlc/essay.html>)
- 秦松梅（2012）「中国人学習者は事前課題と日本語母語話者の参加を取り入れたグループワークによる内容重視の会話授業をどう受け止めたかー中国の大学における日本語専攻クラスの場合ー」『言語文化と日本語教育』44、お茶の水女子大学日本言語文化学会、21-30.
- 鈴木寿子（2011）「留学生教育としての持続可能性日本語教育の活動展開ー国内の大学における実践例ー」高等教育と学生支援第 2 号 1-13.
- 劉娜（2011）「中国の大学における持続可能性日本語作文教育の可能性ー学習者の意識から言語実践を見る」『言語文化と日本語教育』お茶の水女子大学日本言語文化学会、42、41-50.
- 楊小雁（2006）「コミュニケーション重視の教室活動の展開ー『総合日本語』の授業の改善を目指してー『日本言語文化研究開論集』2、国際交流基金日本語国際センター・国立国語研究所・政策研究大学院大学,31-49.
- 福永美佳（2013）「中国の大学における日本語会話の指導法について」人文・社会科学編第 45 号,21-33.尚絅大学研究紀要
- 教育部高等学校外語專業教学指導委員會日語組(編)（2001）『高等院校日語專業基礎階段教学大綱』大連理工大学出版社

秦 松梅

しん しょうばい／お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科

指導教官によるコメント

秦松梅さんは、修士課程から博士後期課程の現在に至るまで、一貫して、言語生態学を理論的背景として中国の大学での日本語教育における会話授業のモデルを提案することを目的とした研究を行っています。秦さんの研究の特色は、これまでの中国会話授業に関する多くの研究が量的調査をもとにした研究であったのに対して、言語生態学という理論的背景に基づき質的調査を行っている点、中国の大学における会話授業の改善という学習者を中心に据えた実践を通して会話授業のあり方を提案することを目標にしている点にあります。

博士論文は三つの研究から構成される予定で、今回貴プログラムの助成をいただき研究 3 で使用する

予定のデータを収集することができました。内容は、研究2で中国人大学生を対象に行った実験的授業（2011年に調査者本人が実施）の成果を言語生態学的観点から半構造化インタビューによって問うものです。現在は収集したデータを分析し投稿論文にするための準備を行っているところです。今後は、同会話活動の実践に参加した学習者のうち日本へ留学中の対象者にもインタビューを行う予定です。

今回の秦さんの調査は、博士論文の一つの柱を構成する論文の重要なデータを収集できた点、実際のコミュニケーション場面で役に立つ日本語指導への貢献が期待される点で高く評価されるものと考えます。

（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科比較社会文化学専攻・佐々木 泰子）

The Potential of Japanese Language Education for Sustainability — The conversation class of Japanese major students in China —

Qin Songmei

The author has got the funding from the Project of “Student Overseas Visits Project”, through the “International Research Program for the Advancement of Women in Leadership” program.

In 2011, we have ever hosted the conversation class for the Japanese major students in China University. By now, two years passed and I collected these data by interview with these students who have ever joined in the conversation class. The data will be analyzed by the method of the discourse analysis to get the scientific and results.

Through this research, I intend to provide what they have learned from this conversation class and discuss the possibility to phase in the Japanese language education in China university education.